

『サインを“出す”も“見つける”も至難のワザ』

いじめ防止のために子どもの「小さな変化」を見逃すな！とは、口で言うのはいとも簡単なことだが、私には“サインを出す側”も、“見つける側”も「至難のワザ」だと思い知ったできごとがある。

「学校楽しいかい？」「うん、友だちもたくさんできてとっても楽しいよ！」と言っていたA君なのに、「明日、学校に行きたくないな」と唐突に言い出したのは中学1年の2学期が始まって間もなくの頃だ。

「どうしたの？」と聞くと「プロレスごっこがイヤなんだ」と話してくれた。その頃、学校では男子の間でプロレスのワザを掛けたり掛けられたりする「プロレスごっこ」がはやっていた。A君も初めのうちは友達同士で技を掛け合ったりして、プロレスごっこも友だちとのコミュニケーションの一つの手段と思って付き合ってきたが、だんだんエスカレートして、彼だけがみんなから掛けられるようになってきたという。

「やめてくれ！って言ったらダメなの？」と聞くと「そんなこと言ったら、みんなシラケちゃって、仲間はずれになってしまうよ」「それに、言ってもやめてくれそうな雰囲気もないし」という。だから、A君は自分で考えて、周囲が嫌がる表現ではなく、大げさに痛がるリアクションでみんなを笑わせ、みんながそのゲームに飽きるのをじっと待つことにしたという。でも、とうとう我慢ができなくなり、意を決して担任に相談した。

さて、担任の先生の対応はどうだったかといえば…。

担任（女性）は、みんなを呼んで話を聞き、A君に言ったことは「みんなは一緒に遊んでいるだけだって言ってるわよ。確かに先生も廊下や体育館で、たまたまあなたを見たとき、楽しそうにしているなって思っていたし…」と。

A君の「みんなから孤立しまい」と我慢してやってきたことが、結果としては担任の判断をも狂わせてしまっていた。このA君のことからも、本人の口から「いじめ」の告白は難しいことなのだ。

大人（教師・関係者）は、死を選ばず勇気を出して「相談してほしい」という。しかし、誰かに相談することによって、より周囲から疎外されると彼等、彼女等は思っている。だから一度や二度の「いじめ」で相談することなど、本当にマレなことで、一度の相談の裏には、その何倍もの「いじめ」があると思わなければならない。

いじめ被害者の子どもにとって、相談できる人は自分の話を真剣に受け止めてくれる人、自分のことを本当に守ってくれる人だと信じていることを真摯に受け止めるべきだ。いじめの現場では、厳しい上下関係ができています。大人から見れば、同じくらいの子ども同士でも、当人達たちの間に

は乗り越えられない上下の関係がある。だからこそ、大人の介入が絶対に必要と考える。

いじめ解消のため、大人の介入で思い出すのはプロゴルファー横峰さくらとその父親のことである。彼女は中学時代「いじめ」に遭っていたそうだ。その原因は月曜日の欠席にあり、「ズル休みだ」と数人の男子からいじめを受けていた。父親はさくらのゴルフ練習を利用料金の安い月曜日に行っていたのだ。

娘の「いじめ」を不憫に思った父親は、ある日、意を決して学校に出向き、担任と級友を前にして、娘がプロゴルファー目指して毎日何時間も頑張っていること、月曜日の欠席もそのためであって、ズル休みではないことを切々と訴えたそうだ。それからというもの、彼女に対する「いじめ」はうそのようになくなったという。

東京都石原知事は「校長は子どもの教育の最高責任者は親である」ことを保護者に発信せよと語る。私たち大人（親）は子ども達に「人としてのあるべき姿」を身をもって伝えなければならないということに他ならない。